

スイスアルプス博物館を訪ねて

鹿野勝彦



1997年(平成9年)
3月号(No.622)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円



地図作成の器材やその方法を展示してある

私がこの博物館を初めて訪ねたのは、一九七九年の秋だった。アルプスの自然とそこに住む人々の生活文化、そして登山をテーマとするこの博物館は、小規模ながら、いかにもスイスらしい、細部まで神経の行き

十一月のスイスは、観光にとってオフシーズンで、おまけにベルンを訪ねた朝は、風が強く、冷たいみぞれまで降っていた。そんなわけなか、アアレ川の峡谷にかかる橋を渡ってすぐ右手のスイスアルプス博物館に入ったときには、開館時刻を十五分ほど過ぎていたのに、私がその日の最初の入館者だったようで、展示室の照明も消えたままだった。五フランクの入場料を払って展示室へ入ると、センサーが作動するのだろう、部屋が明るくなる。

■アルプス博物館再訪

私がこの博物館を初めて訪ねたのは、一九七九年の秋だった。アルプスの自然とそこに住む人々の生活文化、そして登山をテーマとするこの博物館は、小規模ながら、いかにもスイスらしい、細部まで神経の行き

届いた美しい展示で定評があり、とりわけ有名なのは、アルプスの山々の大縮尺の精巧な地形模型(全部で二十七点ある)であった。そこは外国からのトゥーリストにとって魅力ある観光のスポットであるとともに、教育施設でもあって、私が訪ねたときにも、小さな椅子を抱えた小学生の団体が入ってきて、展示を見ながら授業を受けたりしており、当時、新しい博物館を作るための展示企画、設計の仕事をしていた私に、博物館というものの在り方について、いろいろ考えさせてくれた場もあった。

■アルプス博物館の展示

展示はその地形模型から始まる。

目次

スイスアルプス博物館を訪ねて…	1
山と医療・便通…	3
報告	
図書委・山岳図書を語るタベ…	4
山研委・山研利用料の改定…	5
総務委・団体傷害保険の割引…	5
三水会・第351回現地集会…	5
支部だより…	6
信濃支部 秋田支部 山形支部	
山梨支部	
海外の山…	7
新入会員・住所変更…	9
図書室受入報告…	9
図書紹介…	10
東西南北	
登山における未帰還の成功…	12
アルバータ峰のピッケル…	13
再び白神山地について…	15
中沢真二名誉会員の近況…	16
会務報告…	17
INFORMATION …	18
ルーム日誌…	19

▶日本山岳会事務取扱時間	
月・火・木・土曜日	10～20時
水・金曜日	13～20時
▶図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜日を除く毎日	13～20時



ベルンのスイス山岳博物館正面

スイスの地図が、それ自体工芸品と呼びたいほどの美しさをそなえていることはよく知られているが、その伝統をひくこれらの模型も見事なもので、とくに一边が五メートルほどもあるベルナーオーバーラントのそれなど、現地を訪ねたときの記憶をたぐりながら、周囲を巡り、目線の高さを変えて眺めていると、時間がたつのを忘れてしまうほどだ。

アルプスに住むさまざまな哺乳類や鳥類の剥製を中心に据えた動植物の展示や、谷ごとに特色のある仮面や衣装を核とする民俗文化の展示なども、やはりスイスらしいというべ

きか、全体として計算され尽くしたバランスのとれた構成になっているだけでなく、個々の展示物の状態はほぼ完璧で、解説もていねいにつけられている。それは当然のようで、現実に行きしようとするとは実は並大抵ではない努力を要することである。だが、このあたりまでの印象は、以前私がここを訪ねたときのそれと大筋においてあまり変わっていない。本当にこの博物館の展示が変わったと感じたのは、二階の一室にある、十台のテレビモニター型ディスプレイ装置を使い、アルプスの自然や住民の生活の現状と変化の過程、問題点などをテーマにした、一連の展示に接したときである。

■生態学的展示から環境主義者の展示へ

この展示では、ディスプレイ面に表示されたテーマと解説言語（スイスの主要な公用語であるドイツ語、フランス語、イタリア語と英語）の一つを、モニターに接続したキーボードで選択すると、画面上にテーマにかかわるスライド写真の画像と選択した言語による文字の解説が交互に映し出される。ある段階まで進むと、細分化されたサブテーマが表示され、それをまた選択して先に進む。テレビ型モニターを使っても、

表示されるのは静止画像と文字解説だから、展示手法としてはむしろ古典的で素朴な、とても言いたくなるようなものだ。

だがその内容はきわめてラディカルである。取り上げているテーマはきわめて多岐にわたるので、その内容を紹介することはとうてい不可能だが、たとえばアルプスの自然環境に関しては、まずアルプスの自然の基本的な特徴が総論として説明されたのち、氷河、高山草原、森林、河谷といったサブテーマに分かれ、そこからまた動物相、植物相といった項目へ進み、最後はマーマットやオライチョウの生態といった個別の細項目までたどりつくことができる。

だがどのテーマを選んでも（といっても私自身が実際に見たのは、自然環境、地域社会・文化、開発といったメインテーマからスタートする、八つほどの細項目にすぎないのだが）一貫しているのは、単に環境の悪化や、地域・住民の抱える問題を指摘し、その原因を客観的に解説するだけでなく、個別に対象を名指しすることまではしないにせよ、それらの問題を引き起こしている主体を具体的に示し、責任を追及しようとする明確な姿勢である。そしてその矛先が向けられるのは、必ずしも政府や大企業ばかりではない。

飼いならされた「自然」を供給するためにブルドーザーを駆使する開発業者と、その「自然」を買い求めるために嬉々として乗用車を走らせる一般市民とが、ここでは連続して提示されるのだ。

この展示の背景にある考え方は、自然科学としての生態学（エコロジー）というより、それを基盤にしつつ、現代社会への政策的な主張をする環境主義者（エコロジスト）的なそれなのではないか。次々とテーマを変えながらモニターを見ているうちに、私は次第にそう感じ始めていた。だから、たとえば山地の農業・牧畜の現状と問題、といったテーマにおいても、それが従来環境に果たしてきた機能や、今日の採算悪化に伴う危機といった面のみでなく、東欧やトルコからの移民労働者の役割や、彼等の受けている差別といった問題にまで踏み込めるのだろう、と。

■博物館展示というものについて

アルプス博物館には、一時間程度のつもりで入ったのだが、結局二時間半近く館内にいたことになる。昼過ぎ、外へ出ると、雨はすでに止み、近くの山々はうっすらと雪化粧をしていた。

アルプスについて知識の乏しい私には、展示の個々の内容について、

その可否を判断する能力はないのだが、ただ、博物館はあまり政治的な主張はすべきでない、という意見には、必ずしも与しない。もともと展示というものは、博覧会であれ、博物館であれ、展示を行う当事者が意識するとしなにかかわらず、一定の政治的意味を持つのだということは、近年では周知のこととなっている(たとえば、吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書参照)。むしろ展示を見る側にも、たとえば本を読み、映像を見るとときと同様に、展示の主張と対峙する意識を持つことが必要なのだという点こそが、もっと強調されるべきなのだ。

とはいえ元来一時的な性質を持つ博覧会の展示と異なり、常設博物館の展示は、少し油断していると、それこそ日本語の「博物館行き」なる表現が意味するように、毒にも薬にもならない前時代の遺物と化してしまいかねない。アルプス博物館の展示は、その明確な主張で、私たちにある種の緊張を強いる。少なくともこの展示を見たあとでは、スイスは「絵葉書のような」小ぎれいなだけの国には見えなくなるはずだ。それは基幹産業としての観光にとって、何よりも大切なイメージを傷つけることであるかもしれない。しかし他方では、にもかかわらず、多くのト

ウーリストが訪れる場に、これだけ明快な形で問題を提示するスイスの誠実さ、懐の深さを、印象づける効果を持つかもしれない。

ベルンを訪ねた前後の半月ほどの間に、私はスイスとイギリスで二十あまりの博物館を見てきた。その中には、アルプス博物館のように十数年ぶりに再訪したところもいくつかある。それらの多くで、環境に関する展示の比重が、かつてに比べると著しく増しているのは、確かな事実だ。同様の傾向は日本の博物館でもある程度は見られるといっている。だが私がこれまで見た範囲には、アルプス博物館ほど明快にエコロジスト的な主張を行っている展示の例は存在しなかった。

*

「何でそうなったんだろう」十一月の末に帰国して間もなく、三十年近く日本に住んでいるスイス人の友人と、たまたま話す機会があったとき、私は尋ねてみた。「それはベルンという土地柄だろうね」と彼は言う。

「ドイツ語圏は環境意識が強い。ドイツの『緑の党』の影響もあるしねそこへいくと、フランス語圏やイタリア語圏は、まだまだだね」

「なるほど、そういうこともあるのか」と私は一応うなずいたのだが、完全に納得したというわけでもない。

そのうち自分の眼で見比べてみたい、などと思っているのだが、いつのころになるのだろうか。

× × ×
博物館の名称は、ドイツ語では
Schweizerisches Alpines Museum
フランス語は Musée Alpin Suisse

に水晶の如く突き上げ、さらにこれらの向こうには遥か紫に霞むチベットの山々が見渡せる。巨万の富を積んでもこの豪華な便所は、世界の屋根ヒマラヤでしか得られまい。

便通は高所に限らず日本の山でも、また日常生活でも体調のパロメーターである。高所医学の証する「高所における多量水分摂取の必要」という問題にしても、水分の適量あってこそ快便は通ずる。また高度馴化における自律神経系の問題にしても、腸蠕動運動の過不足なきバランスが快便には必要である。高所における隊員の体調を知らねばならぬ医者として、便通も注意すべき大事であるう。

朝の便所で目を閉じると昨日の如くに雄大なヒマラヤが浮かんでくる。爽快な一刻である。誠に臭い、尾籠なことを書いたが、ヒマラヤの豪華な便所は風洗便所で臭くない。もっとも最近は自然環境を守る立場から、登山隊はゴミはもちろん便まで持ち帰る時代であるが……。

山と医療 便通

住吉仙也

ヒマルチュリ遠征日記を読み返してみると、ベースキャンプ以上では「朝快晴」という天候の日には、きまって便通のことが書かれている。例えば「快便あり」とか「色、艶共に極上」とか。ヒマラヤは私にとって初めての経験で、高所ではそれに応じた反応がみられたが、朝、きまったように快い便通があったことは、高度馴化した体の調子を示しているものである。

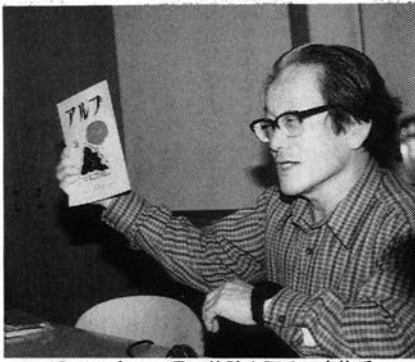
やおらしゃがみ込んで目を転ずれば、この眺めがまた実にすばらしい。北西のマナスルにはじまって、右に緑のブリガンダキを前景としてクターン・ヒマール、スリング双峰、ランプー、ガネッシュ三山が紺碧の空

だから、スイス山岳博物館と訳すべきなのだろうが、スイス政府観光局の多言語によるベルンの博物館案内地図には、日本語で「スイスアルプス博物館」とあり、展示内容からもそのほうがふさわしいと思われるので、こう表記した。(写真・杉本誠)

報告

REPORT
3月日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

図書委員会

山岳図書を語る夕べ
「アルプ」三〇〇号の軌跡

「アルプ」300号の軌跡を語る三宅修氏

雑誌『アルプ』は、昭和五十八年二月の三〇〇号をもって終刊となったが、そのアルプ創刊の準備段階から深く関わりをもち、編集長として活躍された三宅修氏にアルプ二十五

年の軌跡を話していただいた。

三宅氏は東京外語大三年生当時、友人と山岳部を創部することになるが、教授であった串田孫一氏を山岳部の部長に迎えたそのことが、串田氏の知遇を得るきっかけとなった。昭和二十七年のことである。

昭和三十二年、串田氏と外大の若いOBが中心となって、「まいんべるくの会」を創設、季刊「まいんべるく狩人の蝶」がその夏に刊行された。三宅氏は「アルプタ映え」（アルプ三〇〇号）の中で、「この「まいんべるく」は『アルプ』とは直接関係ないかもしれないが、伏流水のような役割を果たしていた、と言っている」と書いている。

外大を出てから三年くらい経った頃、串田氏から「山の雑誌をやらないか」と声がかかった。尾崎喜八氏も加わり、三人の考えを中心につくることにしたが、その時意識したの

は、戦前岡書店が出した「山」という雑誌であった。（昭和九年一月月刊、昭和十一年七月終刊）『アルプ』という名前も三人で考えて決めた。

昭和三十二年一月創文社に対して正式に編集を引き受けた。「山の芸術誌」を目指すこと、誌面をきれいにしたいので広告はいれない、をコンセプトにしたが、広告を取らないため、後に雑誌経営としては赤字になってしまった。

基本的な編集方針として、誌面に写真、絵画、版画を入れること、自然について自分の言葉で語れる人の文章、すなわち山の文学の世界、文学としての紀行・随筆を載せることとした。

雑誌の編集は初めてなので、最初は分からないことばかり、思わぬミスもあった。「2号」の表紙は号数を入れるべきところ「4月号」と入れてしまった（これはすぐ「2」と訂正したものを出したので二種類出ている）。「13号」表紙の版画を上下逆さまに印刷してしまったことなどなど。編集者として、多くの著者との付き合いから生まれたエピソードも紹介された。とくに、串田孫一、尾崎喜八、深田久弥、山口耀久氏など大変興味深いお話であった。

『アルプ』も一〇〇号くらいまで

が隆盛期で、その後しばらく中だるみの状態に入った。それは書き手が固定化し、新しい著者がなかなか現れず、一部からは同人誌ではないかといわれた時期であった。それを救ったのは「特集号」であり、「アルプの夕べ」や「アルプ展」であった。一時期本当に著者がいない時があり、若い人を育てる困難を味わったのもこの頃である。現役でバリバリ山に登っているが、しかもよい文章を書く人が出てきたが、どうも「アルプ」には向かない、という気がした。二〇〇号（昭和四十九年十月刊）以後は、一般に活字離れが進んできたなという感じを強く持つようになった。河田楨、尾崎喜八、辻まこと氏らの死去も大きかったが、時代が変わったことを実感させられた。廃刊にしたのは大変惜しいが、いつまでも続いていると「アルプ」がアルプでなくなり、単なる「山の文芸誌」となってしまったであろう、と思っている。やはり尾崎喜八氏の死が大きかった、と話を結ばれた。

*

廃刊からすでに十三年が過ぎたが、三宅氏の『アルプ』に対する思いと情熱が、決して消え失せていないことはそのお話し振りからも十分に察することができた。十一月二十一日開催、参加者四十名。（岩瀬皓祐）

三水区・第三五一回現地集會

父不見山・新年山行

三水区とエーデルワイスクラブ恒例の合同新年山行である。

一月十一日、十時五十一分、西武秩父駅着。名古屋の妹尾夫妻が待っていた。なじみのタクシーに分乗して小鹿野町の「みち庭」へ行く。蕎麦処を我々が貸し切る。ここの天ザルは旨い。逸品である。

山研利用料の改定

山研委員会

平成九年度から山研利用料(二泊)を次のように改定します。

会員 三千円(十人以上の団体申し込みは二千五百円)

据え置き

非会員 五千円(旧四千円)

小学生 千五百円(旧千四百円)

小学生以下 千五百円(旧無料)

団体傷害保険が割引に

総務委員会

昨年導入された遭難搜索費用担保付普通傷害保険は、五百名を超

昼食後、両神村の浦島・御嶽神社へ初詣で。残雪が凍っていて、神社まで上がった車は一台のみ。こも予約してあったので、神主さんがお茶に、お神酒と大歓待。神主さんに感謝して、車まで下りてくると「Kさんがいない」という。三十分ほど搜索していると、何と地元少女と下から上がってきた。Kさんがお世話になった久保さんの家にお礼を申し上げて、万場町の今井屋へ行く。この旅館は、大先輩の川崎精雄さん

す加入者がありました。これにより本年度の割引率が上がり、保険料は昨年より約7パーセント安くなります。

本年開始(平成九年三月三十一日)分は三月二十七日までの申し込みとなります。四月以降は随時中途の加入となります。詳細資料はハガキで総務委員会宛ご請求ください。

なお、現在すでに加入されている場合は、自動継続となりますので、手続きは不要です。保険料は五月中旬に指定口座より引き落とされます。(既加入者には、後日申し込み内容の確認書類と新保険料表が郵送されます)

の「雪山・藪山」に出ている。

川崎さんはこの日が誕生日で九十歳になられた。夕食時に特別参加の川崎さんのために、エーデルワイスが用意したケーキにロウソクを立てて吹き消し、全員でハッピーバースデーを歌って祝福した。川崎さんは西上州の山の思い出を語られた。

翌十二日、マイクロバスで土坂トンネルを越えて吉田町の塚越を右折し、長久保へ、林道を走って杉の峠直下の登山口に着いた。土坂峠方面から登る道もあるが、ここのほうが便利だ。

杉の植林を伐採して秩父方面の展望が広がる斜面をゆっくり登る。南面なので雪は消えている。杉の峠着九時五十分。少し登ると森林帯となり、気温が低いためか雪が残っていて、尾根の上り下りは少々歩きにくい。左は杉林、右は雑木林で、東西御荷鉾山が北面に鎮座している。父不見山(一〇四七メートル)着十一時。ここも南面が開けていて、遠く北八ツの雪峰が見える。空には一片の雲もなく、天気には恵まれた。

ここから長久保の頭へは急坂を下り、急坂を上る。さらに長久保の頭(二〇六五・七メートル)から坂丸峠への道は、森林帯の中の急激な下りで、道を間違えたかと思うほど歩きにくい。粉雪状の残雪に苦労させ

られた。

坂丸峠着十二時三十分。ここも展望がいい。正面には両神山が少しかすんで見える、逆光のせいだ。峠から長沢に向かって真っ直ぐ下る。長沢着十三時十五分。待っているはずのタクシーが見えない。このトラブはすぐ解決して、小鹿野の須崎旅館(高田さん縁の宿である)へ行き、猪鍋など豪華版の昼食をいただき、十六時、西武秩父駅で解散。

天候に恵まれて雪山を歩き、旨いものを食べ、まさに至れり尽くせりの山行であった。参加者三水区十六名、エーデルワイスクラブ五名。

(石田稔郎)

ゴールデンウィーク 4/26(土)~5/4(日) 9日間

ネパール・カトマンズ行特別運航便

名古屋発着(中国経由)全8コース(トレッキング)

ヒマラヤ越えフライトが魅力です。

成都/カトマンズ間の機窓から、ミニヤコンカ、ジャヌー、カンチエンジュンガ、エベレスト、ローツェ、マカルー、ロールワリン、ジュガル、ランタン、マナスル、アンナプルナまで眺められます。

運輸大臣登録旅行業490号/日本旅行業協会正会員/IATA公認代理店



アルパインサービス株式会社

本社/〒105 港区新橋2-13-8 新橋東和ビル5階 TEL.03-3503-1911

大阪 ☎06-444-3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

仙台 ☎022(265)4611 広島 ☎082(542)1660 札幌 ☎011(711)7106

●詳細ツアー・パンフレットをご請求ください。(株リリゅう観光)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

信濃支部

創立五十周年記念行事開催

一、記念講演会

平成八年九月二十八日、十五時から上高地ビクターセンターで、支部創立五十周年記念講演会を開催した。本部から村木潤次郎会長、大屋悌二常務理事、溝口洋三理事を来賓として迎え、五十四名が参加した。

記念講演は、「マカルー東稜登頂」の演題で山本彦彦登攀隊長が、続いて「K2登頂」を青年部登山隊の山本篤隊長が、それぞれスライドを交えながら行った。両講師のさわやかな講演は参加者全員に深い感銘を与えた。

二、記念式典・祝賀会

十八時から会場を西糸屋山荘に移して、記念式典並びに祝賀会を開催

した。

記念式典は開会の辞に続き、物故者の追悼として支部発展にご尽力くださった諸先輩方に黙禱を捧げた。

来賓の紹介、田中支部長の挨拶があり、村木会長から祝辞をちょうだいする。祝電が披露されて、式典は閉会した。

記念祝賀会は田中支部長の挨拶ではじまり、元支部長塚本さんの音頭で乾杯。大阪、東京方面からの会員も大勢参加し、銘酒の差し入れもあって、二時間の宴会は大盛況のうちに終了した。支部会員でもある西糸屋山荘のオーナー奥原さんのはからいで別室で二次会をさせていただき、



上高地西糸屋前で勢ぞろいの信濃支部会員

明日の記念山行にさしつかえるのではと心配しながら、夜の更けるのも忘れて歓談した。

三、記念誌出版

支部創立五十周年、ウエストン祭も五十回の節目がきたところで、ウエストン祭記念講演のテープを、金子副支部長以下の出版委員が苦労してまとめ、記念講演集として出版した。「パートヴェイルからの風」と題し、記念式典の受け付け時に配布して会員から大変喜ばれた。

四、記念山行

九月二十九日、秋晴れの素晴らしい朝である。西糸屋山荘前で参加者全員で記念撮影をし、小松リーダーのもと西穂高岳独標を目指した。村木会長も西穂山荘まで同行。高度を上げて一息つく頃、眼下に梓川の流れて、紅葉の始まった木々が目を楽しませてくれた。稜線に出ると、燃えるようなナナカマドの赤とハイマツの緑のコントラストが美しい。独標に到着。三六〇度の展望を心ゆくまで満喫したあと、折り返した。記念山行は心に残るものとなった。

(塚原賢勝)

秋田支部

東山・秋山山行

八年十月十九、二十日の両日、県

境の南に位置する東山(一一一七・三メートル)で小集会をかねて秋山山行を行った。

十九日十五時、小雨降る東成瀬村役場前に、十名の参加者と地元の長岩会員が集会した。

長岩会員の案内で、燃えるような紅葉の中、史跡「天正の滝」と「矢櫃の館跡」を見学する。天正の滝までの遊歩道は工事中であったが、現場の了解を得て滝壺まで降りることができた。歩道には設計者の気配りか、ホウ、トチノキ、カエデなどの葉の押し型があり、心打たれる。

夜、「ジュネス栗駒」での懇親会に先立ち、白神山地自然保護の件で澤井、伊藤の両会員が秋田支部の意見を聴取に来県されるとのことなので、支部員の意見交換を行った。引き続き懇親会では、岡田支部長と進藤副支部長の古希を、地酒と岩魚のたたきで盛大に祝った。

翌二十日は曇り空、それぞれの車に分乗して狭く急なカーブの林道を進み、登山口前広場に到着。現地参加の九名も加わり、総勢十九名で滑りやすい急な山路を進むこと十五分、尾根小鞍部で小休止の後、再び朝露の中を登る。この辺りはブナ、ナナカマドの実生が目につく。太平洋では大半が夏を越せず枯れるのだが。

一方、紅葉は最盛期を迎え、例年

になく美しい。八百メートル付近のブナ林はもう枯れ葉に近い。根元を見ると、春のギンリョウソウがわずかに芽吹いており、驚かされる。

主稜の山腹からは時折頂上が見られる。タケノコ採りが多かったため、空き缶などゴミが多い。頂上直下鞍部は笹に覆われた道だが、風が強く頭上をブナの葉が飛んで行く。荒れたガレ場は下りが不安だ。稜線は気温三度、全員で休む場所もないので十時二十分、下の鞍部に下る。

ブナ林でしばらくティータイム、頂上は流れる雲に包まれ、やがて遠雷の中、霰が降り出し、初雪の山行となる。

悪天と足場が悪い中、全員怪我もなく十三時三十分、車に戻った。

なお、一部の会員がこの奥にある下東山へ藪こぎして登頂した。

(宮田菊雄)

友好登山・玉山・雪山

毎年行ってきた当支部の小さな海外友好登山・パート4は、二年前に南湖大山の頂上で誓った玉山と雪山の二山にすんなりと決まった。時期は、農繁期、天候、それに航空券の格安を考慮して、十月二十六日から十日間の日程とし、昨秋、一緒に鳥海山に登った旧知の岳友・林照雄氏の協力を得て、計画はスムーズに進

海外の山

ある大学 山岳部OBの 情熱

江本嘉伸

三月三日夕、「極限の高みをめざして」というテーマで、ガイア・アルパインクラブのヒマラヤ報告会が都内で開かれた。シンブルな高所登山の実践をうたうクライマーを核とした集まりで、報告会は昨年に次いで二回目になる。

十二人が登頂した日本山岳会K2隊のビデオ上映に続き、戸高雅史のK2単独無酸素登頂、小西浩文のシェルパ、故ロブサン・ザンブーとのエベレスト、ナンガ・パルバットを新ルートから登った千葉工大隊の隊長、坂井広志の報告と、どの報告もスライドを多用しての、なかなかの内容だった。高峰の情景を詩のようにとらえた戸高のシャッターぶりが印象的だったが、とりわけ驚かされたのは、坂井の報告である。

北面からのナンガ・パルバット(八二五メートル)の登頂は、千葉工大隊以前には二隊しか成功していない。坂井たちは新ルート開拓をめざして、偵察、準備を進め、九五

した。

C1(五三〇〇メートル)までは、初登と同じラキオト氷河を登るが、そこからC4(七三五〇メートル)までが、北壁をたどる新ルートだ。

岩壁、ナイフリッジ、懸垂氷河、クレバス、雪壁と、ものの見事に、と言いたくなるほど変化に富んだ登攀の連続で、危険も大きい。落石の飛び交うC1からC2(五九〇〇メートル)への岩壁帯では、二人の隊員が落石で負傷、リタイアさせられた。

驚かされたと言ったのは、その登攀の核心部が、坂井自身のビデオによって記録されていたことである。

懸垂の壁で、坂井は片手でバイルを握り、一方の手でビデオ・カメラを 작동させる。足下は、スパンと切れ落ちた空間、あるいは氷壁をトラバースする坂井のアイゼンの爪先。身体は、固定ザイルに確保されているとはいえ、よほどの使命感がなければできないことであろう。

七月二十三日午後五時十三分、坂井ら三人が登頂。トランシーバーの交信記録が隊員たち、支援のパキスタン人メンバーの感激を伝える。

それにしても、高所経験の少ない隊員たちを引き連れて未踏のルートを完登した四十歳の隊長の情熱と抜

もコーチと称して大学山岳部の現役部員と時に山へ行くが、内容の何と違うのか。坂井のようなOBを持った山岳部は幸せである。

報告会の最後、運動生理学者の山

本正嘉が「登山と体力」と題するレクチャーをした。自らを実験台としてトレーニングに励み、チョーユーを無酸素登頂した国際武道大学助教授で、最近はその山岳雑誌に体力についての興味ある文章を書いている。

日本が富士山を持ったことの幸せ、を山本は強調した。これまでの研究データからみると、高所登山で強くなるためには、平地でのランニングや自転車漕ぎだけでは不十分、四千メートルの高度で長く滞在、あるいは鍛錬することが一番、というのだ。

二月に來日したポーランド屈指のクライマー、ヴォルティフ・クルチカと案内役の小西浩文に同行する形で山本は富士山に登り、持論の正しさを確認したらしい。高所順化がとれたクルチカは、ひたすらゆっくりペースで登り、飛ぶような小西とはだいぶ違った。二千メートル級のタトラ山群しかないポーランドと比べ、日本人を羨ましい、とクルチカは言っていたという。

真のクライマーは、富士山の真価を知る者かもしれない。

んだ。

参加者十二名。登山中の五日間は上天氣にめぐまれ、両山の主峰の他、東峰、西峰、北峰、北稜角などにも登り、紺碧の空の下に広がる雄大な眺めや、山頂でのご来光を拝むことができた。

玉山山頂では、建立されていた于右任先生の銅像が三か月ほど前に取り外され、コンクリートの台だけが残されていた。また雪山山頂の三角点は破損がひどく、頭部はない。玉山と北回帰線のものも破損していた。マニアによる被害なのであろうか。

とはいえ、久々の玉山はとくに懐かしい。排雲山荘は施設が整っていて、水洗トイレの完成も間近。距離的にも近く、中高年登山者の海外登山第一歩の山としてもふさわしい。例によって観光もかね、台中県健行登山会の協力を得て、台湾の旅路を満喫した。末筆ながら心から厚くお礼申し上げたい。(佐々木民秀)

山形支部

屋久島・宮之浦岳登山

十一月二十三日、男六名、女一名の一行は、すっかり雪化粧をしている山並みに「行ってきます」と挨拶をして、四時間五十五分の空の旅の後、屋久島の紺碧の海を機窓から眺める

ことができた。屋久島の山は海岸に迫る標高九〇〇メートルから一四〇〇メートルクラスの前岳と、宮之浦岳を中心とする一八〇〇メートルを越える奥岳に特徴づけられる。

宮之浦岳は一週間に八日雨が降るといわれるくらいに雨が多い山である。入山した二十四日も雨で、行動中雨具を脱ぐことができなかった。

標高一六〇〇メートルの高層湿原小花之江河や花之江河も、視界がよければ花の時は過ぎてはいるけれども、スギ、ツガ、ヤクシマシヤクナゲ、ヤマゲルマの混交林の中の木道を歩きながら、目を楽しませることができたであろうと思うと恨めしい。そんな思いをヤクシマササの葉を食むヤクシカの姿が慰めてくれる。

宮之浦岳山頂に立った我々に太陽は柔らかな陽射しを注いでくれた。



宮之浦岳山頂では一瞬太陽が顔を出した

次代に残そう美しい山と溪

しかしそれは一瞬の間でしかなかった。太陽が雲間に隠れるとガスはまた勢いを増して流れて行くのだった。屋久島山中の十一月の平均気温は最高が二〇・五度、最低が五度とパンフレットにあった。二十四日に宿泊した新高塚小屋は一四〇〇メートルの標高にあるが、そこでの一夜は明け方に若干の寒さを感じたくらいであった。

二十五日は、縄文杉、大王杉、ウイソクソクを眺め、屋久島の高齢な巨大杉に圧倒された。大株歩道入り口に下りついて森林軌道上を歩き始めた。この日もまた雨が降り出した。小杉谷の小学校跡地を過ぎて、沢沿いの軌道上を歩いていると、突然後尾から「トロッコが来るぞー」の声に急いで山側に身を寄せる。屋久杉の土埋木を山と積み、その上に作業員が馬乗りしたトロッコが轟音を残して下り勾配を自走していった。岩を削り貫いただけのトンネルを通り抜けたら、迎えの車との待ち合わせ場所の荒川の出合いはすぐだった。そこは先程自走していったトロッコのターミナルにもなっていた。夕食ではそれぞれの二日間の話

肴に大いに盛り上がり、行動を撮影したビデオを見て、その一コマ、一コマに感動を新たにした。

二十六日は天候にも恵まれ、全員そろって島内観光を楽しんだ。この山行は始めから終りまで雨だった。宮之浦岳は一週間に八日雨が降るというのは実感である。(高橋 治)

山梨支部

第三四回・木暮理太郎翁碑前祭と記念山行

一九九六年五月二十五日、金山平は桃の花盛り、夕方から恒例の懇親会が始まる。木暮先生が亡くなり、はや五十二年の歳月が過ぎて、先生をご存知の方も少なくなった。

本年は、とくに北海道から佐々保雄名誉会員にお出ましを願った。木暮先生は旧制二高の同窓生であり、JAC入会の紹介者であったこと、蔵王の二高山岳部の清溪小屋の看板は木暮先生の揮毫になるものであるなど、秘話を披露してくださった。

有井館の心尽くしの山菜料理、毎回好評の岩魚の骨酒は、堀口丈夫、今井洋地両支部員の仕込み。そのほ

か沢山の酒やつまみ、お菓子の差し入れなどがあり、大いに盛り上がった。今年の記念品は、島根県の出西(しゅっさい)窯のぐいのみ。

翌二十六日の朝も快晴。金峰山を正面に見る碑前に額ずき、献酒。故神谷恭名譽会員のご子息・神谷恭平会員は、木暮先生から中学入學のお祝いに万年筆をいただいたことなど、思い出を話され、浅野孝一会員は木暮理太郎伝の構想を述べられた。

碑前祭を終え、若葉の林道を車を連ねて信州峠に到着。甲信国境というより、太平洋と日本海の分水嶺を東に、あつという間に「夕日あたり」(実名信州峠)の小台地に着く。さらに東進し、その名の通りの「石つつ」の狭い山頂に立つ。熊笹の中を急下降し、山腹を巻いて信州峠に帰ってきた。

残留組が、工事用シートを三張り使って昼食の準備を整えて待っていた。突然、華麗なパフォーマンス、日本酒にはうるさい御年八十五歳のS名譽会員が、甲斐の銘酒「谷桜」をコップ二杯続けての一気飲み。喝采を浴びてまたもや大宴会。

汗をかいた後のビール、冷や麦の喉ごしは絶品。別れの歌を合唱、再会を約し、車に分乗して甲府にいたり、解散した。参加者五十二名。

(山村正光)

図書室受入報告(1997年1月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
池田拓(著)池田昭二(編)	南北アメリカ徒歩縦横断日記	607pp/22cm	無明舎出版	1996	編者寄贈
植松満男・中村謙治(共編)	氷壁のワンダーランド: 福岡大山岳会ナンガパルバート1985	91pp/26cm	福岡大学山岳会	1986	花田博志氏寄贈
橋本廣(編)	とやま山紀行	299pp/22cm	桂書房	1996	出版社寄贈
P.シューベルト(著)黒沢孝夫(訳)	生と死の分岐点: 山の遭難に学ぶ安全と危険	302pp/22cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
川村明夫	キャパバン・東ネパールを行く	201pp/21cm	北海道新聞社	1996	著者寄贈
中村進	未知への旅: 南極点スキーマラソン	244pp/20cm	読売新聞社	1996	著者寄贈
串田孫一・他(共編)	富士山 PART-1 (日本の名山 第13巻)	285pp/19cm	博品社	1997	出版社寄贈
中津川勤労者山岳会(編)	未踏の白き頂を目指して: ニエンチェンタングラIV峰1995	165pp/30cm	中津川勤労者山岳会	1996	発行者寄贈
岡田順一(編著)	立山神殿御遷宮	119pp/26cm	たてやま山岳出版会	1996	編者寄贈
塚崎義樹(編)	タクラマカン沙漠縦断と崑崙山脈トレッキング1996	52pp/26cm	中部崑崙山脈 四岔雪峰山麓旅游隊	1996	編者寄贈
片岡秀郎(編著)	阿寒国立公園を歩く (フィールドガイド)	189pp/19cm	コモンサイエンス インスティテュート	1996	著者寄贈
Jim Curran	K2: The Story of the Savage Mountain	271pp/24cm	The Mountaineers	1995	購入
Robert Mads Anderson	To Everest via Antarctica : Climbing Solo on the Highest Peak on Each of the World's Seven Continents	219pp/24cm	David Bateman	1995	購入

図書紹介



イラスト 野田四郎

長岡忠一・著

『スキーの原点を探る』

わが国にスキー技術が導入されたのは、オーストリアの軍人レルヒ少佐によることは広く知られている。

この時代に、ヨーロッパにおいて現在のようなアルペンスタイルの高速回転が行われていたか、というところでもなかった。この頃オーストリアのツダルスキーによって、新しい締め具が開発され、ようやくテレマチックでなく、踵の押し出しによる回転が可能になりつつあった時代であった。レルヒ少佐はその弟子である。その後のスキー道具の発達は目覚ましいものがあり、今日のただ下へ下へとひたすら下るだけのスキーブームをよんで、ついにスノーボードの登場となった。その壮絶な環境破

壊は別として、スキー産業がもたらす経済効果は絶大である。しかしそれでよいのか、何か置き忘れてきはないか、もう一度その原点に戻ってみようではないか、著者はそう訴えている。そのためのスキー歴史紀行文とその資料として十三編の著書を紹介されている。ゲレンデを真一文字に滑降している若者たちに、ぜひ読んでもらいたい本である。

(飯田 進)

一九九六年十月 スキージャーナル(株)発行 一三七ページ 千八百円

新井新太郎・著

『雲取山のてっぺんから』

『雲取山よもやま話』

山莊を守って四十余年、妻子を里に残して山にこもる者の切なさ、訪れる人には語らぬが、仲良く遊ぶリスの番い(ばんい)に当たる。山に溶け込み、そこに息づく草木や獣、小鳥や昆虫が演じ語りかけるものを、何のてらもなく代弁している。話題豊富な山の四方山話。一読をお薦めしたい二冊である。

(飯田 進)

『雲取山のてっぺんから』一九九四年九月 (株)やき出版発行 一六三ページ 千八百円

『雲取山よもやま話』 一九九六年九月 (株)さきたま出版会発行 一八一ページ 千八百円

芦生の自然を守り生かす会・編

『関西の秘境』

『芦生の森から』

芦生(あしう)は京都府の最北端、福井と滋賀に接する広大な森林で、由良川の源流をなす。森の八〇パーセントが一九二一年から京都大学の演習林として貸し付けられ、その約半分は天然林だという。雪深く交通も不便なところから、廃村となった集落もある。

この森に関西電力が、福井にある原子力発電の夜間余剰電力を使って揚水発電所を作るといふ。試行錯誤を経て、木を育て「村おこし」を軌道に乗せ始めた矢先のことだ。芦生の人々は、日ごろの思いと逆行するこの計画に、さまざまな角度から反対運動を続けている。

本書はその運動の一環として、森の魅力と里人の思いを広く世に発信したいと出版されたもの。芦生の地を語り、森の生きものたちをわかりやすく解説し、ハイキングガイドもと盛りだくさんの内容である。

誤植が多いのがちょっと気になるが、芦生ファンの一人としては、い

つまでも昔の森であり続けることを願ひ、さらに内容を掘り下げた第二信、第三信を待ちたい。(泉 久恵)

一九九六年十一月 かもがわ出版発行 A5判 一二六ページ 千三百円

浅野孝一・著

『信仰の山歩き41』

『関東霊山紀行』

山に関する多数の著書のある本会会員の著者が、五十余年の山登りを通して興味を抱いてきた、信仰の山として古くから登られている山を、関東の山四十一座にしばって取り上げたもの。

「近代登山以前に霊山としての山々がいかに登られ今日に至ったかの痕跡を発見すると同時に、その歴史についての古文書類の発見に力を注いだ」と後書きで述べているように、地史に関心のある方にはよく知られている『新篇武蔵風土記稿』『新篇相模国風土記稿』などの豊富な資料を駆使した注記によって、なじみの山を新たな視点からとらえることができる。

巻末の八十九篇からなる資料一覧は参考になる。

一九九六年十月 自由国民社刊 二四四ページ 千三百円

(大橋 晋)

佐藤芝明・著

『現代に活ける山の神伝承』

丹沢山塊北麓に生まれ、幼少年期に村の古老たちより身近に「山の話」を聞きながら育った著者(本会会員)が、山の神の民俗・風俗・信仰がどのようにして伝承され、受け継がれてきたかを具体的にとらえようとしたもの。

構成は「山の神信仰と風俗」「山の神サミット」「関東西部近郊の山の神信仰」「各地の山の神風俗伝承」「山の神と伝説」の五章からなり、調査地域は東北から関東、中部、関西、中国、九州と広範囲にわたる。

山の神の「奇祭」といわれる大垣市青墓(関ヶ原の東)の三百年以前より継承され、すべての住人が参加し、町中を練り回るといふ祭の詳細な模様が取り上げられているなど興味ある文が多数。(大橋 晋)

一九九六年十月 中央公論事業出版
版刊 二四六ページ 二千六十円

薬師義美・雁部貞夫・編
藤田弘基・写真

『ヒマラヤ名峰事典』

本書はヒマラヤの巨峰五百余座の詳細な解説と山群地図、それに大型カメラによる貴重な写真を加えた、

初の本格的な山名事典である。東西三五〇〇キロメートルに及ぶヒマラヤ山系を、便宜上東部ヒマラヤ、プータン、シッキム、ネパール、チベット、ガルワール、パンジャーブの各ヒマラヤ並びに大カラコルム、小カラコルム、ヒンドゥー・ラジ、東部ヒンドゥー・クシユ、アフガン・ヒンドゥー・クシユの十二の山域に分けて収録している。そして、各山域の解説のほか、各民族の生活と文化の項が七名の専門家により執筆されている。

一方メインの山名項目の執筆は、編者のほか、七名の山域ごとのスペシャリストが分担してまとめている。収録の山は、深田百名山の選び方なども参考にして慎重に選定している。最新のデータに基づき、山の地形概要、登山史、日本人による記録も加えた山名項目ごとの内容は、ヒマラヤのデータベースといえる。

一方写真は『ザ・ヒマラヤ』『ザ・カラコルム』などで知られる山岳写真家・藤田弘基氏のモノクローム写真三百三十枚が、一挙に掲載されている。これらは藤田氏自身が、毎年継続して空気の澄む秋から冬をねらって撮影したものの中から選んでおり、山容が分かりやすく、ヒマラヤの名峰事典にふさわしい。本来なら写真集として一冊にまとめてもよい内容であり、写真を見ているだけで

楽しくなる。

ヒマラヤの研究者はもちろん、これからヒマラヤを目指そうというトレkkerにとっても、座右の書として手放せない事典であるといえよう。

巻末には、自然と文化、探検と登山の解説、「ヒマラヤ関係文献」「地名索引」「人名索引」もつけられており、便利である。(松田雄一)

一九九六年十一月 平凡社発行
B5判 六四八ページ 写真三三〇枚 山群地図四八枚 一万三三〇円

児平隆一・著

『新狩野川紀行』

かつて河川は水上交通網の主要な地位を占めていた。東海道から外れた伊豆の狩野川も大切な輸送手段であり、中世以降、その流域に特色ある歴史と文化を形成してきた。

本書はベン(児平隆一)とカメラ(望月康)で、伊豆半島天城山に発して駿河湾に注ぐ狩野川流域に生きる人々の営みと、背景の風土・文化・歴史を、温かい目で綴ったものである。天城山の八丁池・踊り子の天城トンネルに始まり、河口の我入道に至る五〇数キロの旅を、伊豆と縁の深い岡本綺堂、川端康成、井上靖、芹沢光治良などの作家と文学作品で

彩り、楽しく読ませてくれる。

登山家にとって嬉しいのは、天城山・富士山はもちろんのこと、ロッククライマー、フリークライマーのトレーニング場として有名な城山、ハイカーに人気のある大平山・鷲津山・香貫山稜線(沼津アルプス)などの紀行が美しい写真とともに収められていることである。

執筆者の静岡新聞社・児平隆一記者はJACC会員で、自分の足で歩くことの意味をよく知っている人だけに、共感するところが多い。

一九九六年十月 静岡新聞社発行
一二二ページ 二千元 (安間 莊)

東京グリーンホテル 都内に3店舗654室

各種ご宴会、ご会合にご利用下さい



水道橋店 ●千101 東京都千代田区三崎町1-1-16 TEL.03-3295-4161

御茶ノ水店 ●千101 東京都千代田区神田淡路町2-6 TEL.03-3255-4161

後楽園店 ●千112 東京都文京区後楽1-1-3 TEL.03-3816-4161

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚をお願いします)



イラスト 野田四郎

登山における未帰還の成功

大森弘一郎

スポーツ登山において「未帰還の成功」がありうるのかという疑問を皆さんに投げかけてみたい。

「登山は自宅の敷居を跨ぐまで」とは、昔先輩に教わったことである。その敷居の位置が最近変わってきていることは認めなければならないだろう。多分そこは人々が日常の生活を行っている地域との境とでもいえばよいだろうか。

登山はその敷居を出て、敷居まで全員無事に帰ってきて、初めて成功と言えるスポーツではないかと思うのである。

一時「無酸素初登頂成功」しかし

下山中に滑落死、と英雄視するような記事が新聞をにぎわせた時期があった。

これは登山者の考えではなく、ジャーナリズム特有の現象なのだと思いますが、これが一般の人々に登山に対して誤まった認識を植えつけ、登山がねじまがった発展をするのではと危惧していた。実際の私の体験としては、このような風潮に対して、山を知らない知人から、登山は社会悪だと詰め寄られたことがあった。

その傾向が薄らいできたと思っていた最近のこと、私たちの会報(山六八号二ページ)に「帰途は悲劇に終わったが(中略)日本人女性として二人目の登頂(中略)快挙だった」という一文を見た。

亡くなった方、そのご家族(さらにこの筆者)のお気持ちを思うと、以下のようなことは書きたくない。

しかし思う者の義務としていま書かねばならないと重い筆を執った。

ほかのスポーツにおいて「八回の裏まで優勢だったが、九回で逆転負けした、成功であった」、「折り返し点までトップであったが、ゴール間際で足が痙攣して棄権、したがって実質勝ちであった」、「九回まで優勢だったが最終ラウンドでノックアウト負け、見事な健闘で勝ったに等しい」などということがあろうか。「負けは負け、である」

登山において、たとえ登頂の実績が残ったとしても、下山できなかつたということは、登山に失敗した(山に敗れた)のである。戦争ならいざ知らず、スポーツの世界において「人が死んで成功」などあり得ない。この場合適当な言い方は「登山は失敗、しかし頂上を踏むことはできた」あるいは「登頂したが登山は失敗」ではないか。

登山には命の危険がある。だから真剣になり、いかなる場合も、その危険の克服が目的の一つに入っている。その目標が大きいゆえに価値があるのだ。だから「命を失いながらも成功だ」ということはあり得ないことになる。一人でも失うことは、たとえ登頂しても「失敗」であり、どうしても登頂の言葉を使いたくないならば「登頂のあった失敗」となるの

ではないか。「(登頂のある)成功」が皆の目指す挑戦ではないのか。

山登りというのは、ルールを自分で決め、なお審判のいないスポーツである。何を目標とするか、何をもって成功と考えて出発するかを自分で決めて、結果を自分で判定する。たとえば、ある壁を完登して登頂しないで下山しても、壁が目標なら成功だろう。(さらに個人の成功感には自分の作った目標達成で得られる)。しかし生還しなくても成功だとは、恐らく帰れなかった本人も思っていないに違いない。それに対して、周囲は心情として美化した評価をしたくなる。身内や仲間の心情において、周囲の人が考えるときとは違うと思うが、いずれの場合も、そのような判定は苦しいけれど(少なくとも公式の場では)是非ともやめたいものだ。

頂上は命にも勝る価値があると考える場合のあり得ること、そのような考えを私も理解はできる。殉教者のような人と場合があり得るかもしれない。そのような昇華された心があるとしても、しかしそれは個人の立場での価値とすべきで、やはり周囲が行う「健全なスポーツ」として

の登山」の客観評価とは次元の違うところでのものと考えるべきだろう。私にも山で亡くなった尊敬する友人がいる。しかし彼こそが自分の最後の失敗を一番残念に思っているであろう。

また、他への影響力が大きくなるのに比例して、生還への責任は大きくなるのではないか。

さらに難しいのが集団の中の一人の事故についてだ。このときも目標を共有した隊の場合は、失敗と判定するのが一般常識ではないかと思う。

他のチームで競うスポーツで、試合に勝ったが試合中にメンバーに事故があった場合、一般常識は勝ちである。その違いは、山の場合は安全の限界への挑戦が目標に含まれていることによると思う。

重傷での奇跡的生還の場合も難しい。生と死の境には大きな境界があるが、事故の内容もさまざまだからここでは判定が当事者の考えにゆだねられるのではないか。敷居をどこにおくかも、当事者の考えによるものかもしれない。

このように考えて過去のいくつかの登山を振り返り、とりあえず当事者の判定を無視して、「登頂と全員生還が成功」との物差しで、それぞれの山を見直すと、だいたい記録の地

図が塗りかわる。

私の参加した、一九六〇年の慶応義塾大学隊(山田二郎隊長)のヒマラルチュリ初登頂(ハイポーターのカジが雪崩で死亡)は、残念ながら一九七八年の雪と岩の会隊(尾形好雄隊長)に初成功の栄誉は譲らねばならなくなる。

当時は初登頂成功と大きく報道された。しかし最近知ったことだが、この遠征に対しての山田隊長の認識は「山に敗れた」であったとのことである。それは当時の文章『登高行』(16号93ページ)にも残っていた。

一九七三年の西堀榮三郎隊長(我が敬愛する師)のヤルンカンの初登頂成功(松田隊員の登頂後の未帰還)は、一九七五年の西ドイツ・オーストリア合同隊(S・エーベルリ隊長)が初登山成功になる。

一九七〇年の日本山岳会隊(松方三郎総隊長)のエベレスト日本初登頂(成田隊員がC1で死亡)は、一九七五年の田部井淳子さんが女性初登頂者となった日本女子登山隊に日本初成功を譲る。

一九五〇年のモリス・エルゾークのアンナプルナ初登頂のフランス隊、一九五三年のエベレスト初登頂(E・ヒラリーとテンジン)のイギリス隊、一九五五年カンチエンジュンガ初登頂(C・エバンス隊長)の

イギリス隊は、いずれも初成功でもあるが、ガネッシュヒマール峰は未成功峰として残っている(一九五五年フランス・スイス合同隊、初登頂後隊員が滑落死)。

過去の記録を初成功を基準に見直し、一覧表を作ってみたが、紙面の都合で次回に譲りたい。将来このような基準で成功の判断がされることが、常識になることを心から願うものである。

この、過去の栄光の一部に対して泥を塗るような行為について、どうかお許しをいただきたい。私にもこれを言うためらいがあるが、今後の登山と、それを評価する習慣が変わってくれることを期待して、あえて申し述べる次第である。

この一文を亡くなった山の仲間捧げたい。恐らく彼らは領いて許してくれるだろうと信じている。

(常任評議員)

アルバータ峰のピッケル

芳賀孝郎

一九二五年七月二十日午後七時三十分、日本山岳会アルバータ遠征隊長横有恒、橋本、早川、三田、岡部、波多野の六名とスイス山岳ガイ

ドのフリーレル、コーレル二名は、二〇〇〇メートルのキャンプより十六時間の登攀を続けて頂上に立った。ただ無言のままお互いに握手をして初登頂の喜びを交わした。頂上は雪で覆われていたが、少し下がった処に岩が露出していた。そこに、この遠征を支援してくださった細川護立氏のピッケルを小石を集めて立てた。この夜は、途中岩場でビバークし、夜の明けるのを待って登攀のルートを慎重に下り、十四時間後無事キャンプに帰り、アルバータ峰登山は成功した。

アルバータ峰は、その後多くの登山家が登頂を目指したが成功せず、戦後の一九四八年アメリカ隊のオバーリン、アイレス両氏により二十三年ぶりに第二登を果した。彼等は頂上で日本隊のピッケルと登山記録、名前を書いた紙片の入った空き缶を見つけた。そして二十三年間アルバータの岩峰に立っていたピッケルを岩から抜いて、空き缶と共に持ち帰った。アメリカでは、第二登頂者が初登頂の記念の物を持ち帰ることが普通なのである。ピッケルは二十三年間岩と氷の中に立っていたので、抜き取る時石突から一〇センチの部分からシャフトが折れたと思われる。

一九六六年三月、私がニューヨーク

クに立ち寄った折、日航ニューヨーク支店に勤務しておられた松方氏の情報でアメリカ山岳博物館を訪ね、アルバータのピッケルが展示されているのを見た。ピッケルには、M・T・Hと金文字のイニシャルが入っていた。石突の部分は折れて、なかった。M・T・Hは細川護立氏のイニシャルである。しかし、このH文字はいろいろ憶測をよんで、第二登頂者のオバーリン氏が、Hはヒロヒト、エンペラーの頭文字ではないかと下山後日本に問い合わせがあったという。

私はニューヨークの帰途、岳父三田幸夫の計らいでオレゴンポートランド市を訪問してアイレス氏に会った。彼のお宅に三日間お世話になり、アメリカ山岳会の方々にもチョゴリザとヒマルチュリのスライドを見せ、親しく語り合うことができた。アイレス氏によれば、アルバータのピッケルは、頂上で抜き取る時折れたのだが、自分のピッケルをフィックスザイル確保のために、下の岩に残してきたので、帰途、頂上のナイフリッジでは、日本隊の残したピッケルに大変助けられた、という。

私は一九九五年のアルバータ登頂七十周年には行くことができなかったが、九六年、学習院の仲間と念願のアルバータに行くことができた。

サンワプタ川を渡渉し、ウーリー・クリークの針葉樹林を通り抜け、モレーンと氷河を登って、ウーリー・ショールダーに二日がかりで到着して、ようやくアルバータ峰が目前に現れた。アルバータ峰の岩峰は容易に人を寄せつけない厳しい形をしている。今回、先人の偉業をこの目で確かめ、心の奥底からアルバータ峰に向かって賛辞を送った。

アルバータ峰は例年がない大雪で、一九二五年のルートから登ることはできなかった。第三バンドからの取り付きからクローアルは雪と氷でいっぱい、取り付き地点は滝のように水が流れていた。

八月十三日夜〇時四十分、棚橋とカナダのガイドのラリーとマークの三名はアルバータ・ハットを出発した。彼等は第三バンドのクローアルの左壁を登り困難な岩壁ルートを切り開いていった。私は、アルバータ・ハットから望遠鏡で彼等を見ながら声援を送った。クローアル上部をトラバースして右岩壁に取り付き最後の岩壁をよじ登り、十一時三十分尾根に到着した。尾根から頂上までは、ナイフリッジで雪庇もあり、危険な山登りの連続であったが、十四時三十分登頂に成功した。

頂上では、私の指示で、一九二五年のピッケルの石突部分を探す予定

であったが、雪が多くて掘り出すことができなかった。彼等がアルバータ・ハットに帰ったのは二十二時であった。

私たちは、カナダ山岳ガイドから一九二五年のピッケルがアメリカからカナダに移り、現在ジャスパー博物館に展示されているという情報を得た。登山後、早速訪ねた。博物館では右奥のコーナーにアルバータ峰の登山資料が特別に展示されていた。一九二五年のメンバーの写真、登攀中の写真等と説明書を添えてピッケルが飾ってあった。そして第二登のアメリカ隊の記録と共に頂上でピッケルを見つけた時の写真、横氏の書いた登頂の紙片、さらにこのピッケルに纏わる物語まで添えてあった。博物館では、私たちの訪問を喜んで歓迎してくれた。ショウウインドウからピッケルを取り出して私の妻に手渡して、見せてくれた。

このピッケルとは三十年ぶり二回目の対面であったが、手には初めてであった。ピッケルを手にしながら、岳父がアルバータ峰登山後、インドからヒマラヤへと歩んだ足跡を思い出さざるを得なかった。

ピッケルには、MARK Tödi PRIMA NO.3563と刻んであった。私がニューヨークで見た時より、M・T・Hの金文字が鮮やかでピッケ

ル自体が輝いて見えた。石突の部分は、やはり折れてなかった。

ジャスパー博物館は、近年新しく建築する計画があり、アルバータ峰登山の展示コーナーも広げる予定なので、一九二五年の資料、写真を探してほしい、と依頼を受けた。

帰国後、早速横浜の三田宅を訪ね、一九二五年のアルバムを調べてみた。その中に登攀中の写真の他に登攀ルートのスケッチ等が見つかった。さらにアルバータ登頂五十周年の横、早川、三田、三氏の記念写真を入れた封筒の中に、一九六五年長野高山岳部OBによるアルバータ登山の資料があった。頂上写真の一枚にカナダのガイドの名刺、ハーケンと共にピッケルの石突の部分が写っているのを見つけた。私は、この写真に写っている石突の部分は一九二五年のピッケルの一部分ではないかと推測した。もし、長野高山山岳部OBの登頂者二名がこの石突を持ち帰っているならば、日本にあると考えられる。しかしその後、彼等の登頂記録を調べると、頂上には第二登、第三登、第四登の記念品とピッケルの一部分があったことと、第五登の品を置いてきたと記されていたが、ピッケルの一部分を持って帰ったという記録はなかった。

一九二五年のピッケルの石突の部

分が残っていることを登山者は知らないで、まだ頂上にそのまま残っている可能性はある。しかし近年アルパタ峰は毎年一、二パーティーが登頂しているので、誰かが持ち帰ったことも考えられる。

スイスで産まれたこのピッケルは、遥々日本に渡りその後カナダ・アルパタ峰の頂上に二十三年間立っていた。そして四十八年間アメリカ山岳博物館に展示され、今回再びカナダに帰った。ジャスパール博物館によろやく安住の地を見つけたこのピッケルに、石突の部分を早く探し出してピッケル本体と見合わせたいものがある。

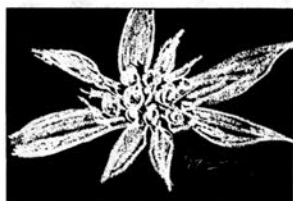


イラスト 宇都木慎一

再び白神山地について

石田稔郎

会報六二〇号に、自然保護委員会

が「白神山地世界遺産地域連絡会議事務局」に意見書を提出したことが報告されている。これは、組織的に非常に意義があるので、再度、意見を述べることにした。

第一は、本部と支部の関係である。山岳会の本部は、支部の活動が円滑に行われるよう、有形無形の援助を行うような立場にあると思うのであるが、この意見書は青森支部と全く反対の立場で書かれている。

青森支部は、白神山地の入山規制について当初から反対している。自然保護委員会の一部の人は、入山規制に賛成の立場で、全国集会の論議をリードして、意見書にまとめて提出した。全く異常としか言えない執念である。意見書を提出する前に、青森支部と徹底的に討論すべきではなかったか。同じ会員なのに。

第二に、自然保護委員会は、独立の人格を持った団体なのか。対外的に意見を発表し、行政等に意見書を提出することが可能なのか、という問題がある。定款の何条、何項によって提出したものであるのか。

第三に、この意見書は、日本山岳会を代表する意見書として第三者に受け取られる可能性があるが、常務理事会、または理事会において審議された文書であるのか。

本来、対外的な文書は、常務理事

会等の審議を経て、会長名で発信されるものであると思うが、意見書提出の経過を見ると、常務理事会の了承を得たものとは思えない。自然保護委員長名で発信したこの文書は、明らかに越権行為であり、無効な文書である、と言わざるを得ない。責任問題も出てくる。

次に、「世界遺産に登録されたから、入山者が激増する」と規制賛成論者は叫んでいるが、青森県側の現地で見聞したのは、保全地区の暗門の滝に観光客などが増え、白神岳尾根の一部が保存地区「核心部」の境界線になっている（の登山者が増加したことである。核心部は増えていない。行政のほうがかむしろ観光客を増やそうとして、白神ラインの赤石大橋の架橋をとりかえ、岩崎村方面では道路舗装工事を進めている。秋田県側の青秋林道は、県境まできれいに舗装されている。

意見書の中で「登山は許可制にする」としているが、許可の意味を知って使っているのか。「許可」は法律用語で、一般に禁止されている行為を特定の人に法律の範囲で許すこと。前提として「白神山地の入山を規制する法律」がなければならぬ。

現在は連絡会議の管理計画があるだけだから、法の制定のために自然保護委員会が林野庁に制定させる運動

をするのか？ あるいは、管理計画を法律と勘違いしているのか。

「既存の歩道」に標識で明示せよという点は、白神岳の頂上稜線の一部が核心部の既存の歩道と見なされるが、余り意味がない。ほとんど存在しないものに、どう標示するのか。

さらに、委員会の中にいる規制論者は「尾瀬のように多数の人が押しかけるようになったら！」と心配しているが、これこそ現場を知らない論法である。

白神山地は、最大の利用者がいると考えられる首都圏から、とくに青森県側は距離が遠くて、交通が不便で、登山道もない。尾瀬のように木道を造って、歩くコースを造ろうとしても、山勢が異なるからできない。青森県側の白神ラインの交通は六月から十月までしか車が通行できない。冬期は雪が深く、特定の人しか動けない。どう考えても登山者が核心部に増加することは不可能である。「入山者の増加による観光地化が心配される」としているが、現場を知らないからこうなる。

秋田県側の藤里町では、「大勢の観光客が白神の何たるかの説明も受けず、大型バスでただ通り過ぎるだけ」といわれている。この不見識な「意見書」を撤回し、自然保護委員

の関係者は交代すべきではなからうか。

終りに、蛇足であるが、ブナ林の日本一が白神山地であるのかどうか、異論が多々あると思う。

本会最長老 中沢眞二名誉会員の近況

松田雄一

本会会員中最長老で、百五歳になられた中沢眞二名誉会員は、百二歳になられてもお元気で、ゴルフを続けられているところまでは知っていたが、その後いかがされているか心配していたところ、旧臘十二月中旬、書籍小包が届いた。開封してみると「私事 本年百五歳になり健康であります故 思い立ち 一生の記憶にあることを綴りました。御覧を度うたい友人は居らず 御迷惑ながら御一読下され度くお願い申し上げます」との挨拶状とともに「私の技術の一生」発明の切掛を掴む」と題するハイドカバーの本が出てきた。

内容を見ると、序章に続き

第一部 電気の世界に生きる

第二部 私の考察

第三部 随想

の三部よりなり、九四ページにまとめられていた。

まず序章において、自分の経験から考えると、学校教育においては、中学半ば以降は、教えられるよりも自分で勉強する。こうして思考力を育てるとこれが習慣となり、時には発明につながる。そして行き詰まった時には発想を変えて別な道に入っている。このように物事に熱心で粘り強いことがきっかけを掴む原因となり、これが発明考察につながる……としてその心構えを述べている。

第一部では、東大電気工学科を大正五年三月に卒業し、東京電灯(株)(東京電力の前身)に入社してから二十五年間、電気(発電所・送電・変電)一筋に生きた人生の前半を「私の履歴書」風に綴っている。入社に際し、時の社長神戸一氏に「停電しない電気を安く作るために一生働きます」と答えた一言が、一生を通じての目安となり、発明・考察をいくつが出すことになったと述べている。東電時代の氏の人生は、波瀾万丈そのものであった。

第二部・私の考察は本論ともいえるべきもので、十五の考察がそのきっかけから後日談に至るまで詳しく解説されている。このうち東電時代に考察されたものは第一号(第二二二号まであり、この中には氏の生涯最大の発明であった価値ある「揚水発電」も含まれている。この他東京電力を

離れてからのものに、成功した「変圧器油劣化防止」や公共性の面で世の中に貢献したと思われる「ガス風呂の煙突」など興味深い内容も含まれている。

第三部の随想は、有名な尾瀬ヶ原を残した話や登山、ゴルフ、私の健康法などの他「多摩川の洪水対策」、「目黒川の五反田溢水の対策」など、大変示唆に富む話が随想としてまとめられている。後者の二つなど、直ぐにも役立ちそうなテーマで、さすがに発明・考察に生きた中沢氏の面目躍如といった感じがする。

× × ×

今から十二年前の昭和六十年、「自然保護」二七七号の「熊ん蜂」と題するコラムに「尾瀬の保護に邁進した役人たち」という記事が載ったのを見て、自分の関わった歴史の一コマを抹消されるのではないかと不安にかられた。憤然として立ち上がった九十三歳の氏が、翌六十一年六月号の「山」四九二号に「尾瀬を残した記録」を書いた。以来続けてきたキャンペーンが七年後の平成三年五月二十三日、本会で公式に取り上げられた(「山」五五四号参照)。その後、国立公園協会の大井道夫理事長に面談され、「国立公園」第五〇三号(平成四年五月号)の視点欄に、自ら筆をとられた大井理事長が、中

沢氏の取られた行動の事実を紹介され、多年にわたる懸案の問題にピリオドが打たれたことはご高承の通りである。

この年、ちょうど百歳の誕生日を迎えられた氏は、年次晩餐会で山田会長より会長特別表彰を受けられ、その後平成六年には百三歳で名誉会員に推挙されている。

当時、私は中沢氏に何度かお目にかかる機会があり、別宮元会長と山を歩かれた話や、老いてから筋力を鍛えた話、変圧器油の劣化防止の特許が晩年のゴルフ人生につながった話、木彫りがボケ防止、老いてからの健康法として役立った話など伺っていたが、本書を目にして改めてその実態がよく把握できたような気がする。

ご子息の透氏(前東邦大学理学部教授、現放送大学教授)から伺った話では、今回出版された本は、原稿の執筆から校正、出版まですべてご自身でなさった由。とても親命の真似はできないと言っておられたが、わが会の最長老にこのような超人的先輩がおられることは頼もしい限りである。今後ますますのご長寿を祈念して止まない次第である。

なお、本書の在庫はないようだが、本会図書室に寄贈されているので、ご高覧いただければ幸いです。

会務報告

【一月理事会】

日時 一月二十三日(木) 十八時三十分

五分十九時四十分

場所 日本山岳会会議室

「出席者」 村木会長、宮下、中村、斎藤各副会長、大屋、中川、吉永、大谷、松浦、伊藤、南井、堀井、渡邊、溝口、山本、田邊、宇田川、熊崎、大蔵各理事、川崎、石橋各監事、小倉、大森、村井各常任評議員

「委任」 水野理事、大倉、重廣、神崎各常任評議員

◎議事に先立ち村木会長より、昨年末の病氣療養に対する見舞いのお礼と、年頭の挨拶が述べられた。

【審議事項】

(一) 資料・写真の借用願の件 大屋「秩父宮記念学術賞の記録」作成にあたり、第八回受賞「一九七〇年エベレスト登山隊の業績」に関する資料・写真の借用願が「様ぎようせい」南関東支社よりなされたが、版權所有の毎日新聞社の了承の上での条件を付して。

(二) 海外登山基金助成の件 海外登山基金委員会 宮下副会長本年度の助成は次の二隊とする。

- ① 日本山岳会東海支部 K2学術登山隊一九九七……… 七十万円
- ② 神奈川ヒマラヤ登山隊一九九七 スキルブルム峰登山隊……… 三十万円 承認

【報告事項】

●公益法人の件 大屋

一月十七日、文部省よりスポーツ関連団体関係者の招集があり、公益法人、会計処理についての説明があった。来期から五千万円以上の収入がある公益法人は、税務署に収支を申告する義務が課せられたので、本会においても、定款の主旨を遵守しての運営に専念する。

【委員会報告】

●財務委員会・吉永

①各委員会へ、来年度の予算要求書は二月三日が申し込み期限なので、期限厳守をお願いしたい。

②平成八年十二月十日付で、会費未納者に対する請求書を発送した。その結果、十二月中に三百十七名から振り込みがあり、会費納入率は九五パーセントとなった。

●総務委員会・中川

①全国支部事務局担当者会議Ⅱ二月二十二日(出)二十三(日)、水道橋グリーンホテル、本会会議室で開催。

②新入会員オリエンテーションⅢ三月十五日(出)十三時より本会会議室を主会場として開催の予定。

- ③ 日本山岳会団体傷害保険Ⅱ一九九六年十二月二十五日現在、加入者が五百十名となり、本年四月より保険料は昨秋の制度改正により約七パーセントの割引実施が可能となった。
- ④ 会員名簿の刊行、年次晩餐会の会費納入方法、会員の意識アンケート調査などについて検討中である。

●集委員会・中川

①一月十日(出)十二(日) 八方尾根スキー懇親会を開催した。

②四月十三(日) 新入会員親睦山行サクラハイック開催の予定(場所未定)

●青年部・宇田川

① K2登山隊一九九六収支決算書Ⅱ余剰金の一部を登山基金に繰入と、報告書作成充当費用とすることとして一月十八日会計監査を受け、承認された。

② 日本スポーツ表彰Ⅱ読売新聞社制定の『日本スポーツ賞』団体・山岳部門で日本山岳会青年部K2登山隊一九九六が選ばれた。一月二十一日、村木会長、山本登山隊長、松原副隊長が出席、賞状・トロフィーの贈呈を受けた。

●科学委員会・松浦

講演会開催

三月十七(日) ルーム

講師・大貫良夫会員(東大教授) テーマ「アンデスの遺跡を掘る」

●高所登山研究委員会・渡邊

委員会の開催

二月十五日(出) ルーム

- ① 『東海支部ウルガルⅡ峰登山隊一九九六』の報告・松岡清司隊長
- ② 平成九年度の委員会活動について

●医療委員会・堀井

講演会開催

二月六(日)十八時三十分 ルーム

講師・長尾悌夫会員

テーマ「凍傷の治療あれこれ」

●会員異動

退会

堀田典郷(九五五五) 9・1・31

五十嵐恵紀(六六四六) 9・1・31

福島正明(一一七〇〇) 9・1・31

増永迪男(六二八九) 9・1・31

味の技、心でつくる



むさし坊 日比谷店
(東宝ツインタワービル9F)
千代田区有明1-5-2 ☎03-3504-1905
むさし坊 麹町店
(有明線麹町駅)
千代田区麹町4-2-6 ☎03-3230-2313
むさし坊 神田西口店
(神田西口通り商店街)
千代田区内神田2-9-9 ☎03-3252-5015
友朋ゆうぜん
(半蔵門線半蔵門駅3分)
千代田区平河町1-3-12 ☎03-3288-5891

むさし坊 番町店 (日本TV通り五番町交差点角)
千代田区六番町4 ☎03-3234-3357

INFORMATION



◆古道を尋ねて・筑波山

図書委員会

万葉の歌垣から天狗党の騒乱まで
関東の歴史を見下ろしてきた懐かし
い山です。

日時 五月十一日(日) 雨天決行

集合 十時 関東鉄道バス「筑波駅」

(JR常磐線土浦駅から五十分)

*参加者は当日、直接集合場所にき
てください。申し込みは不要です。

◆若葉会山行(和賀岳・薬師岳)

集委員会

秋田、岩手の両県にまたがる奥羽

山脈の秘境・薬師岳に登ります。余
力のある人は三百名山のひとつ和賀
岳まで足を延ばせます。新緑のブナ、
山菜、温泉を楽しみましょう。

日時 五月二十四日(土)～二十五日(日)

集合 二十四日十七時

太田国民休養地「奥羽山荘」

秋田県仙北郡太田町太田惣行

大谷地 一〇一五

TEL・〇一八七―八八―一七二七

会費 一万六千円(懇親会、マイク

ロバス、写真、保険料を含む)

申込 氏名、性別、会員番号、年齢、

住所を明記の上、ハガキで日

本山岳会集委員会宛

締切 五月二日(金)必着 定員六十名

*申込者には詳細案内を送付します。

◆探索山行

科学委員会

日時 六月十四日(土)～十五日(日)

講師 県立猪苗代高校・千葉茂樹氏

演題 磐梯山の火山灰からみた火山

活動史

山行 一日目・八方台から猫魔ガ岳

雄国沼

二日目・八方台から磐梯山、

爆裂火口

宿泊 福島県耶麻郡猪苗代町字葉山

七一〇五―一一九

民宿・江花荘(本会会員)

費用 二万円(予定) バス代、宿泊

費他)

募集人員 二十二名(先着順)

申込 五月十五日までにハガキで

千一九三 八王子市横川町九

五四―一三〇 北野忠彦宛

TEL・〇三〇―〇四―六一八八九

*東京からの往復はマイクロバス利

用。後日参加者には詳細を連絡。

◆第三十五回 木暮理太郎翁碑前懇

山梨支部

山梨支部恒例の木暮理太郎翁碑前
祭です。新緑の甲斐へぜひどうぞ。

日程

五月二十四日(土) 十八時・懇親会

五月二十五日(日) 朝・碑前祭、その

後記念山行。車で移動し、黒

富士(一五九六メートル)登

頂(徒歩三時間)後、昼食、

車で甲府に至り解散。

場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山

有井館 TEL・〇五五―一四五

一〇四五五

交通 JR中央線妻崎駅下車、山梨

交通バス増富温泉行き、終点

下車、徒歩九十分。(現地へ

の電話でお迎えに参上。JR

東京都区内・甲府間の特急格

安切符については駅窓口へ)

会費 一万一千円(一泊三食、飲み

もの、記念品、行動中の車代)

申込 千四〇〇 甲府市武田三―六

一七 山村正光まで

TEL・〇五五―二五一―三二七五

主催 日本山岳会山梨支部

千四〇〇 甲府市青沼三―二

一四 エンドウ内

TEL・〇五五―二三三―〇六六六

FAX・〇五五―二二四―五二六五

◆笹子雁ガ腹摺山登山

お花見登山を企画しました。笹子

で会います。他年度同期会会員

の参加も大歓迎です。

日時 四月十二日(土)

集合 中央線高尾七時二十六分発小

淵沢行乗車 笹子着八時三十

一分・駅前(頂上に十二時

十三時)

申込 自由参加です(台風・JR不

通以外は決行)

*下山路に旧道笹子峠、矢立の杉、

笹子鉱泉、笹一酒造見学(試飲無

料)を予定しています。

*各自名札をご用意ください。

◆甲州高尾山・桃の花見の宴

土曜会・赤シャツグループ

桃の花とワインを味わう山旅です。

日時 四月十三日(日)

集合 新宿八時十分発ホリデー快速

ピクニック号甲府行き車内

コース 新宿・勝沼ぶどう郷駅・甲

州高尾山・深沢・ワイン工場

見学・桃の花見の宴・勝沼ぶ

どう郷駅・新宿(約三時間)

地図 二万五千 笹子・石和

申込 千一五〇 渋谷区恵比寿二―

一四一五 内藤勇宛

◆「風よ、山よ、空よ」山彩グルー

プ展

日時 五月十九日(月)～二十五日(日)

会場 世田谷美術館区民ギャラリー

出展者 鈴木正俊、三宅次郎、榎本

進、佐々木ヨシエ、菅沼満子、

富田令子、加藤求二、鈴木捷夫

